

続・奇跡はある

(11)

題字・林田八郎

徳永 耕一

青春の夢(2)

事前に連絡もせずに着いた宮崎で、さっそく山下が橋明代に「明日会いたい」と電話を入れたが、「明日は忙しくて会えません」と、断りの返事だった。

二日目を無駄に過ごした二人は、暗くなつて旅館に戻つてきて、部屋の天井を見つめながら、ため息をついた。

「徳永、もう早くも明日は帰りの日ばい。何とか会わなきゃな」山下の焦りの言葉に、「そうだな」と私も応じた。

帳場に公衆電話をかけに行つた山下が、やがて息を弾ませながら戻つてきて、九州弁で捲し立てた。

「徳永、明日俺たちが発つとき、橋さんは見送りに来てくれるてばい」

それを聞いたとき、私は大きく胸を撫で下ろした。

次の日、列車の出発時刻が迫つてきた頃、駅前ロータリーに黒塗りの車が滑り込んできた。

私たちからやや離れた所でピタリと止まると、後部座席の窓が開き、中から声が出た。私には確かにその声が「徳永さん」と呼んだように思えた。

車から降り立った橋明代の姿は、南国宮崎の夏に相応しい涼やかな服装で、笑顔も弾けるようだった。

そして、運転手つきの高級車は、橋明代の家庭環境を一目で物語っていた。

夏休みが終わつて戻ってきた東京は、相変わらず雑踏と喧騒の渦だった。しかし、私と山下だけは今までと違っていた。橋明代への思いが、ますます募っていたのだ。



宮崎市の風景

Jisco Group

ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社

長崎県諫早市永昌町4-26

TEL | 0957-27-1112 | FAX | 0957-26-1777

東京に戻ってきて一カ月後、ようやく会えた橋明代は、笑顔を見せながら盛んに宮崎でのお詫びを言った。

楽しい会話を交わしているその時、テーブルの下で橋明代の足が少し私の足に触れた。

「あつ、すみません」橋明代が小さな声で詫びたが、私にはその所作が意図的だったように思えた。思い過ごしかも知れないが。

翌年の一月、私たちや橋明代もいよいよ卒業が迫つてきたある日、突然、寮の管理室から私に連絡が入った。

「徳永さん、橋さんという女性の方が玄関にみえています」

私は半信半疑で玄関に急いだ。そこに立っていたのは、紛れもなく橋明代だった。私の驚きは歓喜に近かった。

「こんにちは。突然、すみません」

手短かに挨拶をする橋明代は、今までの明るい声や表情と違って、やや深刻な様子だった。

「私、卒業後実家に帰るようになりました」

宮崎で見たお嬢様ぶりからして、「東京で就職せずに、宮崎で家業に就くことになったのかな」と思った。

「徳永さん、身体に気をつけて頑張ってくださいね」、「はい、ありがとつ。橋さんも」、「それでは失礼します。山下さんにもよろしく伝えてくださいね。さようなら。お元気で」。別れの言葉のやり取りが続いた。

橋明代は、わざわざ別れの挨拶を言いにお礼まで来てくれたのだった。去つて行く後ろ姿をしばらく見送った。

卒業して数カ月後、橋明代が角界のある有名な関取と婚約したことが風の便りに聞こえてきた。

それを知った時、私は橋明代の幸せを密かに願つとともに、彼女とのことを「青春の夢」として心の奥深くにしまい込んだ。

その後その関取は、大方の常識を覆して横綱まで昇進し、「伝説の綱取り」と賞賛された。

〈次回10月28日掲載予定〉